

【報告】

04 中国女文字調査報告

遠藤 織枝

Nushu, Women's Script, Report on '04

ENDO, Orië

要旨：中国女文字の調査は1993年以来ほぼ毎年行っており、その報告も本紀要に9 - 1号以来数回行っている。今回は今年9月に行った調査の報告である。

今までと変わってきたことは、2000年以降現地政府が観光開発にこの文字を利用するという方針を打ち出し、その施策を具体的にやってきていることである。

それによって、保存にも力を入れ始めているが、その保存の方向は、この文字本来の伝統を無視したもので、将来が憂慮されるものとなっている。

1. はじめに

中国女文字は、世に知られてわずか20年だが、その間にさまざまな局面を経過してきている。

最初の80年代は、その珍しい文字の存在が知られて、その事実を確認するための発掘の時代であった。

90年代は、最後と思われる伝承者のあいつぐ死去で、最終段階を迎え、継承を考える時代であった。

2000年代に入って、県政府が漸く保存を考え始めた。しかし、その保存は旅遊開発と裏表の保存で、開発のための保存であった。

こうした変化の中で、現在どのような問題点が生じているか、今回の調

査で知りえたことを報告する。なお、本稿ではこの文字のことを日本語では「女文字」「中国女文字」の語を使っているが、現地の立場にたって述べるときは、中国語である「女書」の語も使うことがある。

追記：この報告を書き終えた1週間後の04年9月25日、陽煥宜が9月20日に死去したとの知らせに接した。そのために、現地訪問時点の報告以外の新事実を盛り込むことになった。

2. 女書文化村の現状

湖南省江永県政府は2002年秋に上江墟鎮普美村¹⁾に女書文化村を開村し、「女書園」を開設した。なお、この村名の表記は、遠藤が調査を始めた93年当時は「甫尾村」とされていた。2002年の文化村が開かれたときの表記は「普美村」となっていた。類似する音で、意味を美化した漢字に変えたものであろう。

この文化村は、女書学堂、女書の伝承者の経歴、女書作品などの展示室、民間工芸品作成・陳列室などからなっている。2002年の11月に江永県や地元の大学の主催で、「江永女書国際シンポジウム」と瑤族の関係の集會が開かれた。遠藤もそのシンポジウムに参加したのだが、その二つの集會に参加した人たちが3台のバスを連ねて文化村を訪問したときは、村人たちも多く出て民芸品を作る実演をし、土産物としての作品も多く、見物者も多くたいへん賑わっていた。

今回1年10か月後、ジャーナリストや研究者、観光客18人のツアーを組んで訪ねたところ、すでに壁の色は剥げ落ち、二階の一部は雨漏りがしていた。何よりも異なっていたのは、閑散として、だれも見物人がいないことだった。展示室も鍵がかかっていて、我々が見たいといって初めて鍵をあけてくれた。その中のさらにガラスのケースの中に三朝書²⁾が2冊他の新しい複製品と一緒に収められていた。展示室の中の古くからのものとしては、この2冊だけで、それ以外は、最近作った工芸品ばかりであった。民芸品を作って見せる人たちもいないし、土産物の売店も陳列商品はわず

かしくなく、買う人もいなかった。2年足らずの間に、見る影もないさびれようだった。

女書学堂は40人ぐらいの人が教わることができる広い教室だが、平日であったため教わる人もいなかった。この教室で教える胡美月にわざわざ出てきてもらったので、我々訪問グループが教わることにした。

「江永女書」を女書で書く書き方を教えてくれた。右から1文字ずつ左に4文字並べて書いた。本来女文字は縦書きだが、胡美月は横書きで教えている。



<写真1> 胡美月 *女文字は右 左へ書いている。翻字すると「江永女書」になる。

「 (書女永江)」の「」の文字を書きながら、胡はまず3本の横画を右上から左下へ傾斜させながら書き、次に右側の縦画、左側の縦画、最後に中央の長い線を縦画で書いた。この筆順は、漢字の書き順とは全く違った女文字独特のもので、その書き方の特徴をきちんと教えていた。

前回来たときは生徒の書いた女文字の作品が後ろの壁一面に貼られていたが、今回はそれもなく壁面は空白だった。

胡美月に、いくつか質問をした。

Q：ふつうの日に教えるときは何をどのように教えますか。

A：まず歌の一句を歌う。そのことばを黒板に書く。それを生徒たちは見て書く。そしてその句を歌う。また次の1句を歌い書いて写させ歌わせる。これを繰り返す。1期1年間で卒業するという周期で、今までに3周期終わった。

Q：今何人くらい生徒がいますか。

A：全部で40人くらいいる。

Q：娘さんたちは、それをどんな目的で習っているのですか。

A：この文字は世界中でここにしかないし、高銀仙（後述）から伝わってきた文字だから伝えたいと考えて習っている。

Q：後世に伝えたいなどというのは、若い娘さんが本当に考えているとは思えませんが、もっと具体的な目的はないんですか。たとえば、刺繍の文字にして売るとか。

A：それもある。また、卒業した娘たちが出稼ぎ先で、2,3人一緒に歌ったりして、ホームシックを防いでいるという例もある。

胡美月の答えは、かなり誇張された作弄的なものであった。前日、ホテルに来てくれた、何静華（後述）の話では、今はだれも学堂の生徒はいない、女子中学生たちは1回5元くれたら、教わりに行ってもいいと言っている、ということだった。

学習者が40人というのも、だれも習っていないというのも、どちらも極端な言い分に思われるが、胡美月の答えも鵝呑みにはできない気がする。

習う目的も、若い娘たちが伝えるという使命を自覚して時間をかけて、ここまで通ってきて習う、というのは非現実的な答えではないだろうか。意識的に文化を伝えるという行為は、専門家や伝承者の場合にはありうるが、生徒たちの習う目的としては、いかにも作り話めいている。若い娘たちが実益もなく、理念だけで習いに来るといえることがあるだろうか。

高銀仙というのは、1980年代にこの文字が江永県にあることが世間に

紹介され、研究者たちが当地に調査研究に出向いたとき、義年華³⁾とともにわずかに残っていた伝承者の一人であった。文字と、歌や民間に伝わる故事や説話をよく知っており、多くの文字資料・音声資料を残して、女文字研究に大きな貢献を残して1990年に没した。

胡美月はその高銀仙の孫娘で、正統の伝承者を自認しており、県政府も「女書伝人(=女文字伝承者)」という称号を与えている。この文字を残し伝えるという使命感を強く抱いており、そのためのかかなり意図的な優等生的答えだったと思われる。

旅遊局のガイドに見物人は月に平均して何人ぐらいくると尋ねたが、月によって多い月も少ない月もあり、人数の統計を取っていないからわからないという返事だった。大体の人数でいいからとさらに尋ねると、学校の子供たちが先生と一緒に来るし、最近はいろいろな県や市の幹部たちが、いっぱい下の役人を連れてくることがある、そういうときはたくさん来る、という答えが追加された。

入場料の他にオプションとしてお金を払えば、昔の娘たちの結婚式の前の「坐歌堂」⁴⁾の儀式を見せてくれるショーのようなものがあるというので、見ることにした。しかし、それはショーなどと呼べるものではなく、素人の出し物にすぎなかった。

なお、県の書記⁵⁾・張愛国の2004年3月付けの報告書⁶⁾には、「去年以来1万人を少し超える観光客が来た」と述べている。開村以来とすれば15か月で1万人、それを月平均にすると670人、1日あたり20数人ということになる。

また、この報告書にはこの文化村について、次のように記されている。

開発されなければ保護は続けられない、保護されていない開発は根本的な開発にはならない。江永県委と、県政府は始終保護と開発を同じように重視することを原則として、女書文化を頼りにして、深く女書文化を掘り出している。女書文化のすぐれた点を利用して女書文化村の旅遊発展計画を決めて、江墟鎮普美村を女書文化村として作った。こうして

女書文化旅行事業を活発化して、文化資源優勢から現実的な生産力への転換が実現した。昨年以来1万人を越す観光客が訪れた。文化村には女書園を建て、その中に女書学堂、女書作品展示室、女紅室⁷⁾、女書芸術品室などを作った。その地の生産品、生活風習、女書文化をその中に溶け込ませ、女書文化の保護と開発を行った。

ここで、書記は「旅行事業を活発化し」「女書文化の保護と開発を行った」と明言しているが、県の方針はあくまでも、この文字を開発に利用することである。女書で観光開発を盛んにし、その経済効果で女書を保存・保護できると県は考えている。しかし、その目論見は現段階では成功しているとは思われない。平日だったせいか、観光客は我々18人のグループだけで「活発」ではなかったし、展示室も資料室も貧弱で見るべきものもほとんどなく、女書が「保護」されている実態は見られなかった。

県書記の記述と実際に目にした文化村には大きな乖離があった。

県政府は2003年10月に5人の女性に「女書伝人 (= 女文字伝承者)」の称号(写真2に示す)を与えて、毎月20元の生活補助金を給付することに



<写真2> 県政府が与えた「女文字伝承者」の称号

決めた。その5人とは、陽煥宜、何艶新、何静華、胡美月、義遠絹だという。このうち、娘時代に大いに使った陽煥宜は確かに伝承者と言えたのだが、惜しくも去る9月20日に世を去った。何艶新も娘時代に使ったことはないが、祖母から直接に習って昔の女性と同じような情感の歌が作れるから、伝承者といってもいいだろう。しかし、その他の3人は伝承の過程も伝承の能力も陽煥宜、何艶新とは全く違う。

何静華は1997年の我々の調査のとき、古い歌のインフォーマントとして協力してくれた。その際、この文字の価値を知って、それ以後、本によって独習し習得した。胡美月は高銀仙の孫娘ではあるが、娘時代に祖母から十分に習ったわけではない。

義遠絹という女性には会ったことがないが、書記の説明⁹⁾では高銀仙の孫の妻だという。93年以来毎年訪ねていて、高銀仙の家も訪ねて孫にも会ったことがあるが、その女性には会っていない。文字を書いてもらったこともない。中国の研究者の研究論文の中にも登場したことはない。高銀仙の家系ということで突如浮上した「伝承者」らしい。

5人の選定の基準は、昔からの女性の歌が歌える、この文字が書ける、読める、歌が作れる、と周囲の人たちが認める人だ、と張愛国は答えている。その5人にレベルの差が大きいことを梟は考慮していない。何艶新以外の3人も一応の基準には合っているかもしれないが、それは学習により習得が可能な範囲である。文字を書くだけなら、少し練習すればできる。形だけの継承ならできる。だが、昔の女性がこの文字を作り、使い、伝えた際の情念は伝えられない。昔の女性の書いた独特の字体と風格とその思いを伝えるのは独習では難しい。結婚で別れる義理姉妹たちが悲哀を込めて作った歌を作るのも、今の社会環境では不可能に近い。辛うじてこれができるのは、陽煥宜と何艶新だけだった。しかも、陽煥宜はつい最近亡くなった。何艶新はこの文字を書くとき辛い記憶が蘇ってくるからあまり書きたくない、という。

そうすると、お墨付きを与えられた3人が伝承者としてクローズアップ

されてくる。本来の伝承者と言えない人が、県の認定で「伝承者」とされて、一人歩きし始めるのである。文字を残すためにはだれでもいい、どんな文字でもいい、という安易な判断による5人の「女書伝人」の認定はあまりにも杜撰すぎると思われる。

3. 伝承者の現状

3-1 陽煥宜⁹⁾

9月7日に訪問したときは元気そうに見えたのに、その2週間後の20日に亡くなった。その最後のやりとりを再現してみる。

いつもの銅山嶺農場に訪ねた。2002年のときよりもさらに小さくなっ



<写真3> 陽煥宜 銅山嶺農場の自宅の前で

たように見えたが、顔を見るなり嬉しそうに手を延べてくれた。薄暗い狭い部屋から明るい室外に出て1時間ばかり、書いたり、歌ったり、インタビューに答えたりしてくれた。

まず年を聞いた。「98歳か99歳だ」という答えだった。

趙麗明¹⁰⁾の最新の本『百歳女書老人 陽煥宜女書作品集』(国際文化出版公司 2004)には1909年7月2日生まれと記されている。県の旅遊局のガイドは1906年生まれだと言う。県の生年で計算すると、陽煥宜のいう98歳, 99歳でいいことになる。しかし、陽煥宜本人が言うのはともかくとして、県政府の公式見解と、研究者の記述とに3年もの差があるのは困る。現に目の前にいる人の年が3年も幅があるのは混乱してしまう。どちらもその説の根拠を示し合って妥当な線に集約すべきであろう。それが無理なら、

どちらも根拠を示して併記するしかないだろう。

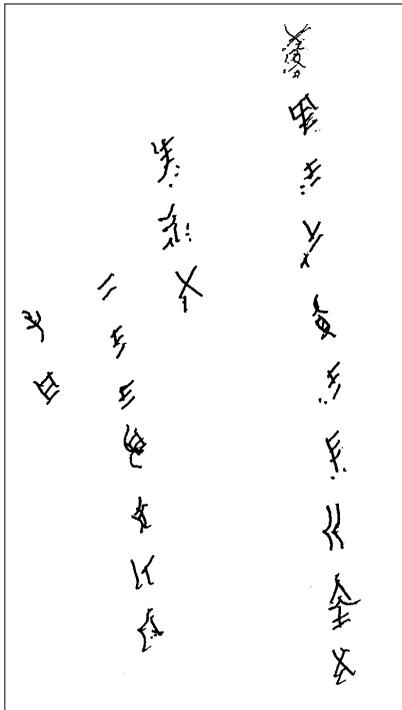
次に陽煥宜に何か書いてほしいと頼むと、〔図1〕のような文字を書ってくれた。

それを漢字に翻字すると次のようになる。

「遠里老師育到来没有歡待
陽煥宜

二〇〇四年九月七日」

まだしっかりした筆の持ち方で、震えも見せず書いてくれた。少し形は乱れているが、「遠くから来てくれたのにもてなしできなくてすまない」と、即座に考えて書いたものである。歌もいい声で歌ってくれた。歌は「一取天上娥眉月



〔図1 陽煥宜の文字〕

二取獅子搶秀球 三取三星三結義……」というこの地の女性たちがよく歌うものであった。女文字も今でも頼まれれば書くという返事に、大いに安心して、陽煥宜の家を辞去したのだが、その2週間後に亡くなったとは、全く信じられないことで、悲嘆にくれている。

陽煥宜こそが、娘時代にこの文字を実際に使った最後の人で、今回も「義早早の所へ行って習った、人に頼まれて三朝書を何冊も書いた」と、答えてくれたところからも、本来のこの文字の正統な伝承者と言えたのである。

3-2 何艶新（1940生まれ）

すでに何度も訪ねて女書の伝承の経緯は聞いて報告しているので¹¹⁾、ここでは近況だけを伝える。

最近孫が大病で入院して可哀想でならない、お金もかってたいへんだ、というのが再会早々のことばだった。そのあたりのことを書いてみてほしいと頼むと、推敲しながらかなりの時間をかけて、以下のような歌を書い



<写真4> 何艶新 江永県のホテルで

てくれた。〔図2〕

その意味は以下のようになる。

来到江永把筆写 没成修書先泪垂 左思右想心不安 孫兒得病骨髓炎
如今住院一月滿 不知要用多少錢 眼看孫兒心中痛 看見開刀苦難当
每次来看双流泪 孫兒幾時身健康

文字の風格が従来のものをよく伝えているし、歌の3句目の「左思右想心不安」は、従来女性の使ったフレーズである。孫への思いや経済的な困難など、心を痛めることの多い心境を女書の歌で伝えている。

以下はいくつかの質問に対する答えである。

Q：最近どうしていますか？

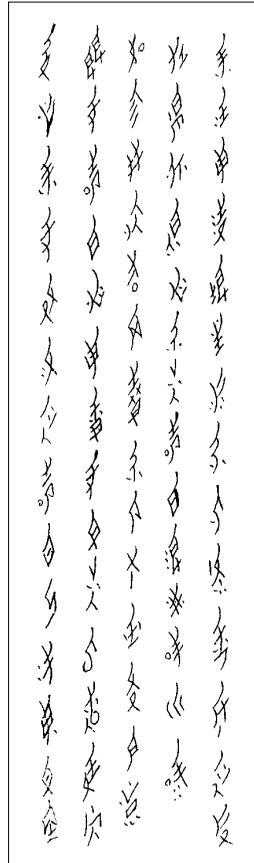
A：最近は長男の9歳の孫が骨髓炎で手術して、入院しているので、そのお金に困っている。手術に1万元かかった。長男は3000元は出したが、それ以上はないので何とかしてほしいと自分に頼んできている。きょうも町に出てきて、見舞ってきたが、いつも行くたびに、帰らないでいてほしいと孫に泣かれるので辛い。

Q：女書を書くときはどんな気持ちですか？

A：自分の両親や自分の生活の苦しみを自伝に書いている。女書作品の多くは苦しみ悲しみを書くものだから書きながら泣いたりする。

Q：「女書伝人」の額をもらってどう思いますか？

A：別に何とも思わなかった。月に20元もらうが、孫の見舞いの葡萄を買ったら18元した。伝承者は若い人を養ったほうがいい。



〔図2 何艶新の文字〕

末娘も書けるようになった。娘は歌のメロディーはまだ覚えていないから、歌えない。「祝英台」、「張氏女」¹²⁾、民歌などが書けるが、歌えない。

Q：若い人は昔の人のような悲しい気持ちはわからないのではないですか？

A：若い人はふだんはあまり悲しいことはないが、父親を亡くしたときは娘も悲しんだ。今はわたしの自伝を娘が読めるようになり、読みながら泣いた。

いまは男女平等でどちらかというと女性の方が強いので、女性が悲しくて歌うことはないだろう。

Q：あなたのお母さんは義理姉妹がありましたか？

A：なかったと思う。親戚の人が来ても一緒に歌ったのを聞いたことはない。母が三朝書をもらったことはある。母の娘のころも女書があった。上江墟の人々で書きたい人は祖母の所に頼みに来た。祖母は学校に行ったことがあるので、漢字もできた。86歳で死んだ。母も漢字が読めた。三朝書は祖母の葬式のとき一緒に埋めた。祖母は解放後、わたしの13歳のころまで女書を書いていた。その後は全く使わなくなった。古い物が批判されるようになったので。

Q：女書を教えていますか？

A：教えてほしいと頼みに来る人がいたが、女書を書くのはいい気持ちにならないので教えたくない。娘以外には教えない。

Q：ふだん書いていますか？

A：求める人があれば書くが、ふつうは書かない。

Q：何静華さんの文字をどう思いますか？

A：答えにくい質問だ。彼女のは美しい。自分のは美しくない。義年華、高銀仙の文字は細くて小さかった。何静華の字は長くて曲がっている。昔の人もきれいな人とそうでない人がいたのだから、いろいろな人がいていい。趙麗明に周碩沂¹³⁾の『女書字典』の中の間違った

中国女文字調査報告

文字を直してほしいと頼まれたが、仲が悪くなるから断わった。周碩沂はわたしの文字が間違っていると言うが、これは祖母から習った字だから仕方がない。

女文字を書くと気持ちがよくないから書きたくない、教えたくない、というのはこの文字の従来の使われかたの本質を突いている。自分から積極的にどんどん書いて配っている何静華とは対照的だ。

また、何静華の文字についても、たとえ批判的なことを言いたくても、互いに近い所に住むもの同士では、本心を言えば住みにくくなるので、それを防ぐために答えを避けたものと思われる。

3-3 何静華（1940年生まれ）

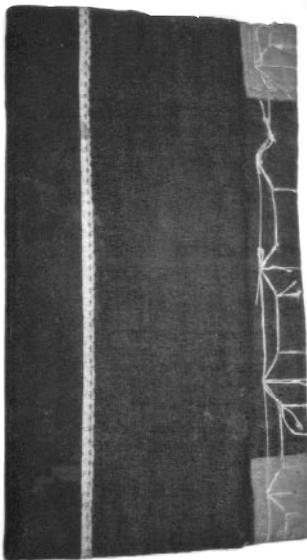


<写真5> 何静華 「静華女書院」の看板をかけた自宅の前で

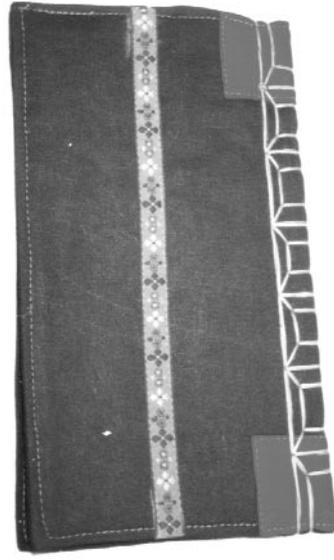
1997年から書き始めたいきさつは、既に報告している¹⁴⁾。ホテルに会いに来てくれたとき、三朝書の形をした布製の冊子を5冊持ってきた。その冊子の体裁でその大きさや綴じ方、右上と右下に赤い布を貼っていることでは、従来のもと同じだが、違う点も多い。(写真6,7に示す)

その相違点を比較して表にしてみる。[表1]

このように、相違点のなかで、特に2、3は重要な点で、何静華は伝統を無視している。昔の女性たちは、表紙の布を1枚のものでなく、中央から左に4分の3ほど偏った位置で、布を切り替えてその部分はバイヤス布にして三朝書を作った。一見同じ布に見せながら、実はバイヤス布をあしらって、いつも、よくめくって手の触れることの多い部分を丈夫にしておくという、きめこまかな手の込んだ作り方をしていた。しかも、どんな三朝書も同じ作り方をしていた。女性たちの、愛着の深さと細工の巧みさが表れていて、三朝書への思いを象徴的に表している部分とも言える。この重要な点を何静華は全く考慮していない。



<写真6> 古来の三朝書



<写真7> 何静華作の「三朝書」

中国女文字調査報告

[表1 古来の三朝書と何静華作の「三朝書」の比較]

| | 従来のももの | 何静華のもの |
|--------------|---------------------------------------|---------------|
| 1. 表紙の布の色 | 黒 | 明るい紺色 |
| 2. 表紙の布の切り替え | 左側の全体の4分の3ぐらいの位置で切り替えがある | 切り替えがない |
| 3. 左端の布目 | 切り替えた部分はパイヤスの布目 | 1枚の正規の布目 |
| 4. 飾りテープの位置 | 左側から4分の1あたりの位置に、切り替えの縫い目を隠すようにして貼り付ける | ほぼ中央に貼り付ける |
| 5. 縫い方 | 手縫い | ミシン縫い |
| 6. 文字を書く紙の量 | 3枚6ページに限られる | 5枚以上書いている物が多い |

本物がほとんど見つからなくなった今後、何静華作の「三朝書」がどんどん制作されて世に出ていくとしたら、この文字の伝承に大きな弊害をもたらすことになる。

6.、中に書かれた文字の枚数にも問題がある。従来のもものは、10枚程度綴じられた紙のうち、歌を書くのは3枚6ページに限られていて、他の残りの紙には文字は決して書かれず、刺繍の糸や型紙、それにきり紙などを挟むのに使われた。三朝書の使い方の特徴の一つである。

ところが、何静華はこうした特徴には頓着せず、何枚でも書いている。

さらに、その中に書かれた文字も、形が従来のもものと異なり、形を良くするための気取った字形になっている。

以下に何静華と、何艶新、高銀仙、義年華の字形を比較してみる。その表を次頁に示す。[表2]

何静華の文字は、何艶新もいうように一見美しい。極端に縦の線を伸ばして美しく見せている。しかし、それ以外の伝承者のもものは、そのような誇張した線は見られない。

文字の配列についても、従来のもものは文字が7文字の歌のとおりには切

[表2 4人の文字の比較]

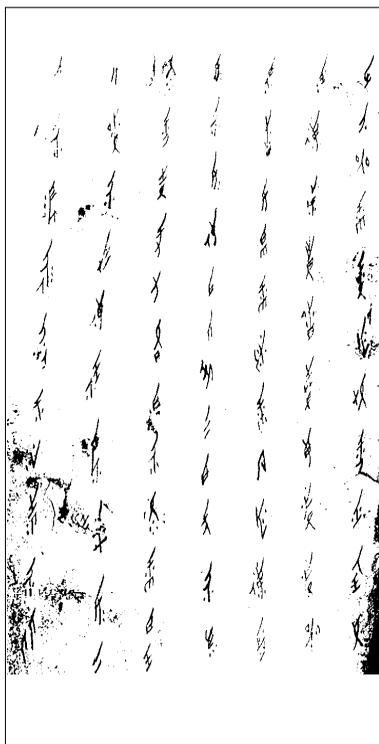
| 城関音 | 何静華 | 何艶新 | 高銀仙 | 義年華 |
|--------------------------|-----|-----|-----|-----|
| (来) 1ø ⁴² | | | | |
| 仕 suø ³³ | | | | |
| (有) hou ²¹ | | | | |
| (到) lau ²¹ | | | | |

2004年9月入手

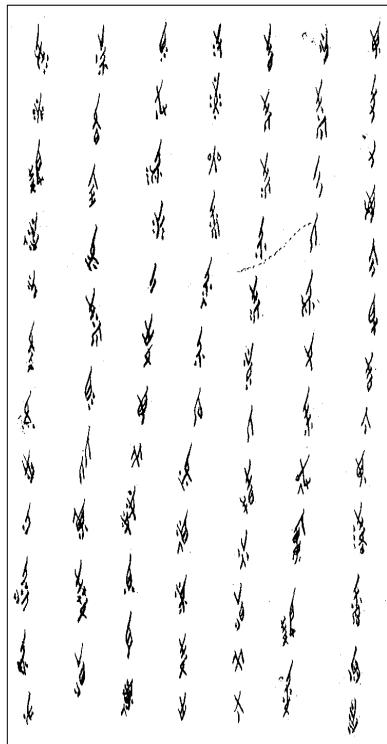
2004年9月入手

宮哲兵『女性文字与女性社会』(新疆人民出版社1995) P.12

1999年4月 義年華の孫娘からのコピー



[図3 ある三朝書A]



[図4 ある三朝書B]

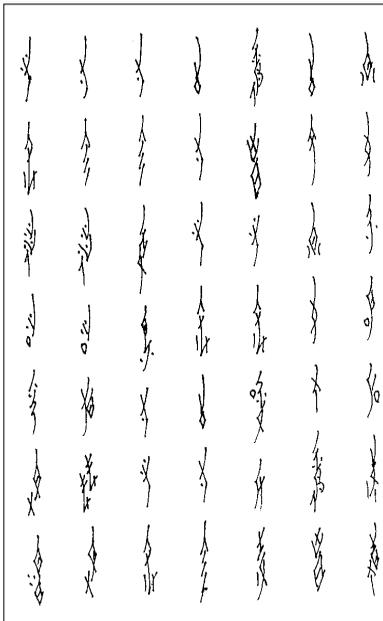
られていない。思いのままに、行を変えている。何静華のものはきちんと、7文字ずつ書き整えられている。〔図3、4、5〕

〔図3〕は第1、3行目は11文字、2行目は10文字、4行目は12文字と、自由奔放に文字が配列されている。〔図4〕も第1行目は13文字、2行目は11文字、3、4行目は12文字と各行の文字数は一定していない。思いのままに書き連ね、形式を整えるよりも、進む想念が優先している。

〔図5〕の何静華のものは、どの行も7文字で揃えられて、確かに整然として読みやすいし、美しい。しかし、昔の女性の、形よりも思いが先に立った、表現のありように心を寄せようとはしていない。

この点について何静華に聞くと、さらに困った答えが返ってきた。

「以前、県の宣伝部に頼まれて文字を書いたことがある。古い清代の三朝書と、中に何も書いてない三朝書¹⁵⁾を持ってきて、文字のない方に、古い三朝書と同じ字を写してほしいと頼まれた。古いものは1行の



〔図5 何静華の「三朝書」〕

文字がそろっていないくて、歌の切れ目と改行が一致していなかったもので、読みにくいと思って、1行ずつに分けて写した」

というのである。彼女自身のものではなく、古い白紙の三朝書にも彼女流の書き方をして戻したというのである。

体裁は昔の三朝書で、中身は元の文字とは違う何静華流の文字で、しかも彼女流に改行して文字の配置も変えた物ができたわけである。こうした経緯をきかずに、政府の所蔵する資料として、古い三朝書を見せられた人は、これこそ昔の女

性が書いたものと思うだろうし、これが昔の女性が書いた文字だと受け取るだろう。また、文字の配置も昔から7文字ずつ整然と記されたと誤解するだろう。

何静華は生活も豊かで時間的な余裕もあり、陽気な性格で歌が好き、文字を書くのが趣味だと言い切る。外部からの訪問者から頼まれればいくらでもすらすらと文字を書いてみせる。こうした積極性は県にとっても都合が良く、大いに登用し、「女書伝人」の称号も与えた。何静華はこれに気をよくして、ますます活発に女書宣伝活動に邁進している。

こうした何静華のものが多く残されることは、女文字の将来に大きな危惧を抱かせる。文字や三朝書の、従来の姿と違うものが伝統的なものとして残されていくことになるのを、いかに食い止めるか、新たな大きな問題が起こっている。

3-4 胡美月（1962生まれ）

97年3月に会ったときの話。¹⁶⁾

娘時代に祖母がこの文字を書いているのを知っていたが、習おうとは思わなかった。80年代の初め、祖母のことが有名になり、学者やマスコミが来るようになって、この文字が価値があるということを知った。高齢の祖母がいなくなったら、この文字は消えてしまうと気づいて、85年、23歳のときから祖母に習うようになった。しかし、そのころは結婚して祖母の許を離れていたし、時間もなくて十分には習うことはできなかった。

歌を書いたものを写すことはできるが、自分で自分の思っていることを書き表すことはできない。

2002年11月のときの話。¹⁷⁾

「女書学堂」で土曜日と日曜日、午前も午後も教えている。学堂ができる前、別の家で、2001年春からボランティアで教えていた。

学堂の生徒は20-30人。10歳から50歳までの普美村の女性。他の村か

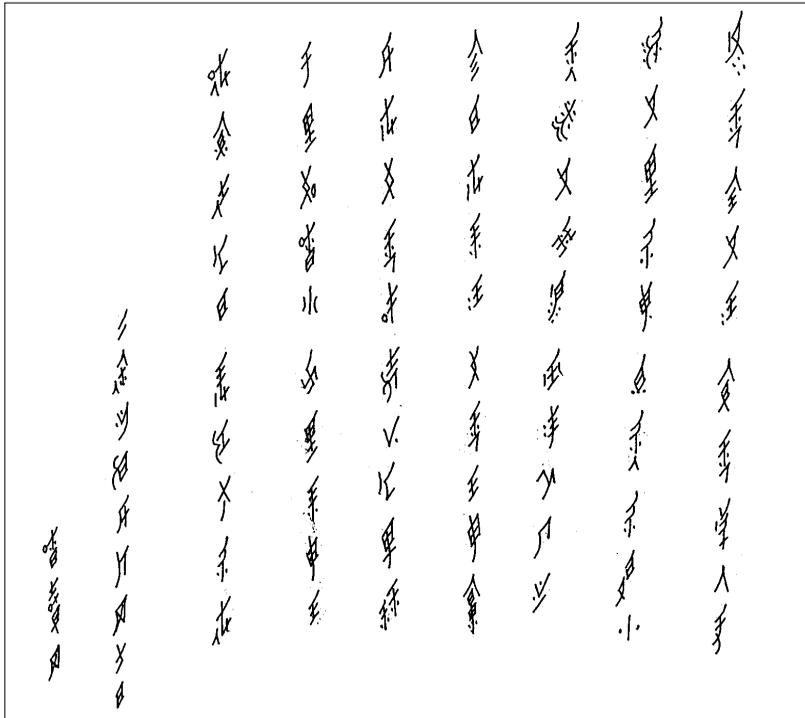
中国女文字調査報告

らは来ない。学校を卒業して出稼ぎに行ってしまう娘も多いのでなかなか続かない。

授業料は取らない。講師料が県から支給される。

2004年9月に聞いた使命感あふれる彼女の考え方は、p.71で述べたとおりである。97年のときも2002年のときも自分の歌は作れないと言っていたが、今回は自分で作った歌を見せてくれた。教えているうちに文字とこの地の土話の音が一一致してきて、その思いも表現できるようになったのであろう。〔図6〕は今回の胡美月の歌の1部である。翻字すると、

修書伝文到 識書字人看 差文理不深 請你不取笑
我的文学低 用時方知少 今日以来到 女書園中会
咱与才書通 結下好姐妹 千里如湖来 万里来共水



〔図6 胡美月が作った歌の1部〕

相識是好日 長行義不休 となる。

思いというより、儀礼的な歌であることがわかる。何艶新のような切々たる思いは伝わってこない。一方、文字の姿は祖母のに似た素朴な風格を伝えている。

胡美月は高名な高銀仙の孫ということと、教えることに使命感を持っているので、学堂の教師として文字の形や音を教えるのには適しているかもしれないが、この文字の伝承者としては何艶新に及ばない。

4. まとめ

今回の調査で、現地政府の女書に対する考え方と現在取っている措置が、明らかになった。女書の本来の姿を尊重し、伝統に忠実に残すというのではなく、その形だけを開発に利用するという、経済優先の方向である。

この地の女性たちが自ら創造し、悲哀を訴え、慰めあう手段として脈々と伝えてきた、この貴重な文字が、消滅寸前の段階で、経済に翻弄されているのである。

変形し、変質して形骸化したものを残して後世に間違ったものを伝えるよりは、ここでは自然に滅びるままに任せた方がいいのではないか。

そして、今しなければならないのは、まだ存在する可能性のある、従来の女性たちの残してきた資料を、できるだけ多く掘り起こし、そのままの姿で保存し、デジタル化して記録し、広く遠く後世へ残す財産をつくることではないだろうか。

付記：文中の人物名はすべて敬称を省略している。

本調査は2003-2005年度科学研究補助金（基盤研究（B）（1））に基づくものである。

注

- 1) 江永県の東北部の上江墟鎮は、女文字伝播の中心地とされ、普美村はその鎮の中でも最も盛んに使われたとされる村。高銀仙が住んでいた村。
- 2) この地の娘たちが、望まない結婚を強いられて、泣き泣き嫁いだ3日目に、実家から婚家へ贈り物を届ける習慣があった。それらと一緒に届けられる冊子で、中には娘との別れを悲しみ、結婚後の幸せを祈る歌が女文字で書かれていた。こ

中国女文字調査報告

の冊子が女文字の生まれたきっかけでもあり、また、文字を発展させた媒体でもあった。

- 3) 高銀仙と同じ時期に、女文字の伝承者として多くの文字資料・音声資料を残してこの文字の研究に貢献した女性。1991年没。
- 4) この地では、結婚式の前3日間、親しい娘や近所の女性たちが集って、嫁ぐ娘との別れを惜しみ、泣く歌を歌い合う習慣があった。その1連の儀式のことをいう。
- 5) 日本の県知事に相当する、県の最高責任者。
- 6) 2004年9月10日北京で開いた「女書歴史現状と未来」と題するシンポジウムの予稿集に書かれた県書記・張愛国の「江永県抢救保護和發展女書所做工作的情况汇报」
- 7) 「女紅」とは、糸紡ぎ、機織、刺繍、縫い物、布靴作りなど、女性がした手作業の総称で、それをしてみせる部屋をいう。
- 8) 2004年9月6日に県政府を訪問した際の県書記・張愛国の答え。
- 9) 陽煥宜の伝承者としての経歴は、『中国の女文字 伝承する中国女性』（三一書房 1996）、『中国女文字研究』（明治書院 2002）に報告している。
- 10) 清華大学教授。1986年から女書の研究に従事し、势力的に研究し報告している。
- 11) 何艶新の伝承者としての経歴は9)と同じ2冊の本に報告している。
- 12) 「祝英台」「張氏女」とも、民間に伝わる説話の題名。
- 13) 1950年代から女書を収集し調査を始めた男性。2002年に今まで集めた文字に基づいて『女書字典』（岳麓書社）を出版したが、中に周碩沂の造字が含まれているとして批判されている。
- 14) 何静華が女文字を書き始めたいきさつは『中国女文字研究』に述べている。
- 15) 村々を歩いて調査し、原資料を探していると、昔の女性が作った文字のない三朝書に出会うことがよくある。文字が書かれたものは、掘り起こされてあまり残っていないが、文字のないものは今でも、村に残っている。
- 16) 『中国女文字研究』参照
- 17) 同上
- 18) 普美村のこと。

参考文献

- 遠藤織枝（1993）「中国の女文字」（『言語』9月号p78-95）
（1994）「94夏湖南省女文字現地調査報告」（文教大学文学部紀要9-1p10-31）
（1995a）「女性と文字 中国女文字の示唆するもの」（『女と男の時空ヒメとヒコの時代』藤原書店p439-471）
（1995b）「95年中国女文字調査報告」（『ことば』16号 現代日本語研究会p128-136）
（1996）『中国の女文字 伝承する女性たち』（三一書房）

「文学部紀要」文教大学文学部第18-2号 遠藤織枝

- (1997a)「女文字 娘たちが作り、伝えた表音文字」(『しにか』6月号大修館書店 p41-47)
- (1997b)「96夏中国女文字調査報告」(『文学部紀要』11-1 p128-156)
- (1998a)「中国女文字とその魅力」(『ユリイカ詩と批評』5月号青土社 p77-85)
- (1999)「98中国女文字調査報告」(『文学部紀要』12-2 p23-38)
- (2000)「99中国女文字調査報告」(『文学部紀要』13-2 p147-164)
- (2001)「女文字を刻んだ太平天国「銅貨」」(『ことば』22号現代日本語研究会 p15-27)
- (2002a)「中国湖南省の女文字 風土が生んだ女性たちの文化」(『SCIENTIA』No21 日本学会事務センター p1-6)
- (2002b)「女性の創造力の産物 中国湖南省の女文字」(『日本語学』12月号明治書院 p62-94)
- (2002c)『中国女文字研究』明治書院
- 小幡敏行(1992)「女書をめぐる若干の問題について」(『文化言語学 その提言と建設』三省堂 p139-153)
- 趙麗明・桜井千佳子訳(1993)「女書(Nushu) 中国の女文字」(『日本語学特集 世界の女性語 日本の女性語』明治書院 p95-99)